

國學院大學學術情報リポジトリ

2019年度国際研究フォーラム「21世紀における国学研究の新展開国際的・学際的な研究発信の可能性を探る」報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-14 キーワード (Ja): NDC8:121.52, 国学 コクガク キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001624

国学における言語学の意義

ジョン・R・ベンテリー
北イリノイ大学 教授

1、はじめに

私は、ハワイ大学の博士課程で日本語言語学を専攻にしましたが、本居宣長の専門分野とする和歌・日本文学・日本史も研究しました。私は最初は宣長が開拓した学問の道を辿るつもりはありませんでした。しかしながら、究極的に、同じ分野を勉強するに至っています。

私は、現在アメリカ中西部にある北イリノイ州立大学で教えています。中西部で見られる国学に対する主な研究は、「日本」の独特な文化とアイデンティティー及び国学の明治維新への影響などです。一般的には、アメリカでの国学に関する研究は、知的歴史・文学・思想などを中核研究とする学者によって進められていますが、多くの学者と違い、私自身は研究の視座を文献批判と言語学に当てています。そこで今日は「21世紀から見た国学における言語学の意義」というテーマで進めていきたいと思います。

言語学というのは、一般的には社会科学の一分野で、言わば、ソフト・サイエンスです。前期・中期の国学の日本語に対する発想・観念・理念は、先駆的であり、知覚的であったとの評価が妥当だと言えるかもしれません。むろん、国学者の国語の文法や音韻の描写は十分な学問的な基礎概念を踏まえたものではなかったということも事実です。しかしながら、西ヨーロッパのネオグラマリアン等の影響をまったく受けずに独自の分野を確立した経緯を考えると、賀茂真淵・本居宣長・鹿持雅澄などの国学者の慧眼・鋭い分析力に驚きを禁じえません。今日は、この三人の国学者が築き上げた国語学の土台を振り返り、言語学的視点から国学について話したいと思います。

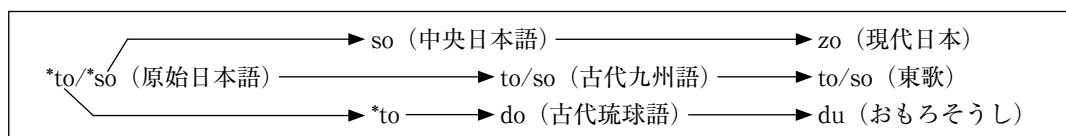
2、賀茂真淵の言語研究

文法論において、動詞の活用を初めて分類したのは、賀茂真淵です。真淵は『語意考』の中で動詞の機能に準じて名称を考えました。現在でいう連用形は、体言と呼び、ウゴカヌコエという読みを付けました。英語では、連用形を infinitive（不定詞）と言います。つまり、連用形には、大まかに二つの働きが含まれていると言えます。一つは、動詞を不定詞にし、もう一つは、継続的な働きにします。面白いことに、この二つの用法上のアクセントは異なり、昔はその働きの区別がアクセントで指定されていました。この不定詞の用法を見抜いた賀茂真淵は素晴らしいです。次の活用は、現在でいう「終止形」ですが、真淵は用言と呼び、ウゴクコエという読みを付け、「その物のわざを言う」言葉と定義しました。

この動詞の分類によって、賀茂真淵は動詞に接尾辞が付くことに気づきました。この接尾辞は現在「助動詞」と言いますが、真淵の分析によって初めて複雑な動詞をいくつかの形態素に分け、その働きをより細かく説明することが可能になりました。

賀茂真淵は、係り結びについても触れました。遠江のある門人への手紙の中で「ぞ」はいわゆる動詞の連体形につき、「こそ」は已然形につくことを説明しました。それ以上の説明はありませんが、真淵の動詞の変格をめぐる洞察力の深さは注目に値するものです。本居宣長も『詞の玉緒』において真淵が解明した事項をより組織的に説明しましたが、真淵より深く突っ込んだ文法の説明には至りませんでした。

係り結びの研究の進歩についていえば、最近の新里とセラフィムの本、『沖縄語の係り結びの共時的・通時的研究—前近代日本語との比較を通して—』という研究は看過できません。まず、汎日本語 (Pan-Japanese 琉球語・東日本語・西日本語を含む) の日本語祖語の時代に遡ると、係り結びの「ぞ」は二つの形として存在しました。その形は、「ぞ」及び「と」です。この「と」は次の表が示すように「万葉集」の東歌に現れます¹。



なぜ係り結びが動詞を連体形または已然形に変化させるのかは意見が分かれるところです。John Whitman 教授が最近、係り結びはある言葉に焦点を当てて、強調すると論じ、その用法は、係り結びの助詞が付く言葉や節が名詞化されるので、文法上動詞が連体形に代わる必要があると主張しました²。また Samuel Martin 教授は、已然形はもと連体形プラス名詞の -i の融合したものであるもので、原始時代の日本語において、すべての係り結びの助詞は、動詞を連体形に変化させたと結論付けました³。

3、本居宣長の音韻研究

日本語の音韻論には、本居宣長が大きな影響を及ぼしました。浄厳や契沖といった宗教に根付いた学者は、音韻という原理を宗教的、または宇宙的な思想として捉えていました。しかし、宣長は、現代的な角度から研究を成し遂げました。彼は『古事記伝』の言語学的な分析の基礎と言える『漢字三音考』を著わしました。その書で、日本の音韻に影響を及ぼした漢字音を科学的な鋭い目で分析しました。宣長の明敏な文字の見方は、次の言葉で描写されます。「植物の生長するように漢字漢文を取り込んで人々の自然となっている日

¹ Rumiko Shinzato and Leon A. Serafim, *Synchrony and Diachrony of Okinawan Perspective with Premodern Japanese*. Global Oriental (London, 2013), 137-138 頁。

² John B. Whitman, "Kakarimusubi from a comparative perspective," *Japanese/Korean Linguistics*, vol. 6, 1997, 161-78 頁。

³ Samuel E. Martin, *The Japanese Language through Time*. New Haven: Yale University Press, 1987, 668 頁。

本語について、宣長はまず、文字、及び字音が外来であること、この事実を改めて強調する」のです⁴。科学的な分析を進めるためには、まずその現象に現れるパターンを見ぬく必要があります。宣長は初めて呉音・漢音・唐音がその順に日本へ伝来されたと発見しました。この発見は、奈良時代の文献の精密な研究に基づいています。

また橋本進吉が発見したとされる上代特殊仮名遣いは、実は、本居宣長とその弟子、石塚龍麿が既に糸口を見つけていました。『古事記伝』の「仮名の事」には、「又同音の中にも、其言に随ひて、用る仮字異にして、各定まれること多くあり（現代訳：同音の中にも、その言葉に従って、用いる仮名が異なり、各々定まれることが多くある）」と初めて説きました。宣長が挙げた例として、子供の「子」には、古という音仮名を用いていますが、「これ」という言葉には、許という音仮名を用いていると指摘しました。肝心なことは、この音仮名の「綴り」に見られる混同は『古事記』では見られないということです。宣長は仮名遣いが厳格な法則に則っていることを認識していて、「それはいまだあまねくも試みず、なお細かく考えるべきことなり」と終止符を打ちました。橋本進吉が万葉仮名の音韻の法則を見出したと公に言われますが、厳密に言えば、2003年のMarc Miyake氏の「古代日本語」という本が出版されるまで旧仮名遣いの音韻論には理論面で多くの疑問が残されていました。私が言いたいのは、大野晋教授の「(音韻の)問題の本質を(宣長と)龍麿は見抜くことができなかった」という批判は当たっているとは言え、橋本進吉は、宣長と龍麿より理論的基礎という点では有利な立場にいたにも関わらず、それらの古代音韻に対する謎を解くことができなかったということです。つまり宣長が古代日本語の音韻の本質を見抜けた・見抜けなかったという論争ではなく、私は宣長が『古事記』や『日本書紀』にある仮名遣いの組織性を指摘したことに重点を置きたいと思います。こう述べると、反直観的に聞こえるかもしれませんが、次のデータに注目していただくと、私の主張がご理解いただけるものと思います。

意味	古事記	日本書紀	万葉集5巻
石	伊斯 (4)	以辞 (1) 異之 (1) 異志 (1) 伊辞 (1)	伊斯 (1) 伊志 (1)
打つ	宇知 (4)	于答 (1) 于智 (1) 于知 (1) 宇智 (1)	宇知 (1) 有知 (1)
思う	淤母 p- (3) 意母 p- (1)	於望 p- (4) 於謀 p- (2)	於母 p- (3) 意母 p- (4) 於忘 p- (1)
風	加是 (3)	加筮 (1) 柯噬 (1)	可是 (1)
神	加微 (1) 迦微 (1)	伽味 (2) 柯微 (2)	可尾 (2)
この	許能 (6)	許能 (3) 虚能 (1)	許能 (6)

⁴ 田山令史「『漢字三音考』—本居宣長の言語観—」、『仏教学部論集』、97号、2013、30頁。

事	許登 (9)	居登 (1)	許等 (1)
心	許許呂 (5)	虚々呂 (2)	許々呂 (3)
		許居呂 (1)	己許呂 (1)
白	斯路 (2)	辞漏 (1)	之路 (1) 志路 (1)
鳥	登理 (5)	登リ利 (1)	等利 (2)
		等利 (4) 苔利 (2)	
涙	那美多 (1)	那瀾多 (1)	那美多 (1)
物	母能 (1)	望能 (1) 茂能 (1)	勿能 (1) 母能 (3)
		暮能 (1)	母乃 (1) 物能 (3)
渡る	和多 r- (3)	和多 r- (7) 和哆 r- (1)	和多 r- (2)
		倭柁 r- (2)	
忘れる	和須 r- (2)	倭須 r- (1)	和須 r- (1) 和周 r- (2)

また、宣長は『漢字三音考』の「呉音先定まれる事」で、漢音が入ってきた以前に呉音が日本列島で使われていた事実を指摘しました。『古事記』の万葉仮名の読みから、昔は「帝」はテ、禮はレ、西はセと発音されたことを根拠にして、呉音が漢音より前に日本に入ってきたと説きました。宣長は、百済人、それから中国人が日本に渡来し、漢字を教えたと論じました。宣長の主張は、現在の視点からすれば、当然ですが、学問的に確認はできるでしょうか。古代朝鮮半島の三国時代の音韻は、半島の地名表記の断片を除いて、ほとんど不明です。日本の学者の間で「魏晋朝の音韻は未だ復元に成功しておらず、その音韻は残念ながら不明とされている」⁵という説がありますが、2007年に Axel Schuessler 教授は画期的な研究、『古代中国語の字源字典』を出しました。その字典には、紀元後2・3世紀のいわゆる東漢中国語の音韻が復元されています。そのデータによると、宣長が指摘した三つの漢字の漢圈音は次の通りです。

漢字	字喃	中越音	中韓音
帝	đé	đé	thyey
禮	rě, trẽ	lẽ	lyey
西	tây	tây, tê	sye

このチャートにあるように、短母音の例は、ベトナム漢字音とベトナムの万葉仮名とも言える字喃^{チュノム}に現れます。中韓音は、「中世後期中国語」に基づいて、漢音に近い字音です。簡単な結論として、呉音は、もと百済漢字音によったものですが、古代日本列島の漢字圏の音韻は、それより複雑です。しかし、宣長の鋭い分析力は、呉音が漢音より古いということを見抜いたのです。

⁵ 古賀達也「『漢代の音韻』と『日本漢音』内倉武久氏の「漢音と呉音」に誤謬と誤断」(『古田史学会報』101号、2010)。

4、鹿持雅澄の文法論

古代日本語の文法論をさらに発展させたのは、鹿持雅澄です。『万葉集古義』の「総論」で、雅澄は動詞の特徴を説明しています。その中の「伸言^{のべこと}」において、普通の動詞が伸びる現象を説明します。例えば、流るという動詞が「流らふ」という形で現れたり、あるいは、「ながらへ」として現れるといった事象です。雅澄は、当時の「識者はその動詞の形の違いが説明できず、ただ歌の句数、いわゆる字余りと字足らずに応じて、動詞を伸ばしたり、縮めたりする」と批判しました。雅澄はこの動詞の変動の言語学的な要因を見抜くことができませんでした。意味論上の違いは把握できていました。「流る」と「流らふ」の違いは、「『流る』は水が流れることを直接に言い、『流らふ』はその流れることを引き続き絶えずのんびりと流れることの意味である」と説明しました（「総論」52－53頁）。

現在の日本の言語学者の説明によると、助動詞の「ふ」は、継続または反復の意味として説明されます。この助動詞は、平安時代に入って、使われなくなりましたが、現在の日本語にその断片が残っています。例えば、「住む」が「住まい」として残っています（sumu > sumapu > sumapi > sumafi > sumai）。私は、他の国語学者と同様、この助動詞は、もと「合う」*ap- という動詞がほかの動詞の連用形と接続して、この「継続」の意味に転化したと思います。その証拠として、「万葉集」の訓仮名には、「合」や「相」などの字がこの助動詞を表すために使われています。「あう」という動詞の元々の意味は、「つなぐ」ということで、複合動詞の前の動詞部分の語幹の母音が脱落して、未然形という活用のように見えます。Alexander Vovin 教授は、このいわゆる継続の助動詞「ふ」が動詞の構成要素の順として、ほかの助動詞の前に添付する事実を指摘しました⁶。つまり、表にすると、次の通りです。

動詞 + 継続 + 敬語 + 態 + 否定 + アスペクト + 過去 + 進行 + 叙法 + 伝聞 + 叙述

Vovin 2005:165 参照

次の例を見てみましょう。まず、「祝詞」にこの例を見てみましょう。

- ① いはひたまへ 斎給部 ip-ap-i tamap-ye（道餐祭）
祝 - 継続 - 敬語 - 叙法

「万葉集」には、次の二つの有益な例を紹介します。

- ② うつろひにけり 移尔家里 uturwo-ap-in-ikyer-i（478 番）
移 - 継続 - アスペ - 過去 - 叙述

⁶ Alexander Vovin, *A Descriptive and Comparative Grammar of Western Old Japanese*. Leiden: Global Oriental, 2005, 821 頁。

- ③ 宇都路比奴良牟 uturwo-ap-in-uram-u (3916 番)
移 - 継続 - アスペ - 叙法 - 叙述

雅澄の日本語の形態論の描写が開拓的であったことは、万葉集学という狭い分野以外には、あまり注目されていません。「略言」という節には、言葉の音韻変化を説明するために、三つの範疇を設定して、実例を列記します。その三つとは、a) 母音の通音、b) 母音の脱落、c) 他動性、つまり自動詞・他動詞の区別です。a) の例は、「たどき」と「たづき」の類です。b) の例は、「ありそ」荒磯で、もと「あらいそ」の「あ」が脱落し、残った r- と次の i が融合して、ありそになります。c) の例は照するという自動詞と照らすという他動詞です（「総論」56 - 57 頁）。

5. おわりに

2017 年 5 月 14 日に行われた日本語学会 2017 年度春季大会シンポジウムの報告は、「国学の言語研究には、現代の私たちから見ると明らかな誤謬や、あるいは大局的な観点に欠ける言説もあり、わざわざ国学の言説に立ち返って論を立てることはなされなくなってきている」と断言しましたが、現代の学者の学問的な感覚に研ぎ澄まされた知的な目で物を細かく見る傾向を減らせば、前・中期の国学の言語研究が国語学に与えた影響の重要性は認められるでしょう。

2013 年に私は、本居宣長の『たまかつま』の英訳版を出版しました。原文は 1005 項目からなっています。その約半分にあたる 504 項目を英訳し、2013 年に出版しました。『たまかつま』の原文の項目を分類すると、宣長が取り上げた課題は次の五つの分野に分けることができます。

項目	教訓	歴史	言語学	日本対外国	文献批判
割合	11%	17%	24%	31%	17%

この表からは、本居宣長の学問の深淵性が窺えますが、海外でよく見落とされがちな分野は、言語学と文献批判です。私は、その穴を埋めようと努めています。

2017 年に出版した『国学選集』という国学者の著述を集めた本の中で国学の四大人を初め、契沖から明治維新の初期になくなった鈴木雅之までの 13 人の国学者の書いた研究を四つの分野に分類しました。すなわち、和歌・文学・学問・古道～神道という四つです。

今後国学の海外への発信、海外での発展には種々の可能性が秘められていると言えます。私は宣長の鋭い分析力と同様、国学に言語学を加えることによって、その研究を拡大・活性化する可能性があると思います。例えば、『古事記伝』の総説にプラトンやアリストテレスの記号論を思い出させるような意義深い文が書かれているからです。

「抑意と事と言とは、みな相稱へる物にして、上代は意も事も言も上代、後代は、意も事も言も後代、漢國は、意も事も言も漢國なるを、書紀は後代の意をもて、上代の

事を記し、漢國の言を以、皇國の意を記されたる故に、あひかなはざること多かるを、此記は、いささかもさかしらを加へずて、古より云傳たるままに記されれば、その意も事も言も相稱て、皆上代の實なり。是もはら古の語言を主としたるが故ぞかし。」（現代訳：そもそも意と事と言とは、みな適っていたものである。上代は意も事も言も上代、後世は意も事も言も後世であり、中国は意も事も言も中国のものであるが、日本書紀は後世の意をもって上代の事を記録し、中国の言辞をもってわが国の意を記録したために、適わないことが多いのであるが、古事記は少しも利口ぶる態度を加えることなく、古代から言い伝えたままに記録したので、その意も事も言も互いに適っていて、上代の真実を伝えているのである。）

また、宣長は学問を進めるのに大切な深い洞察に満ちた言葉を残しました。

「おのれ古典を説くに、師の説と違へること多く、師の説のわろきことあるをば、わきまへ言ふことも多かるを、いとあるまじきことと思ふ人多かめれど、これすなはちわが師の心にて、常に教へられしは、『のちによき考えの出で来たらんには、必ずしも師の説にたがふとて、なはばかりそ。』」（現代訳：私が古典を究明するに当たって、師の学説と相違していることが多く、師の学説に悪い点があるのを、判断して別の学説を立てることも多くある。それを、弟子として大変不当な態度であると思う人が多いようだが、こうした自分の態度こそ師の精神であって、師は常に『後になり、よい考えが出てきたら、必ずしも師の学説と相違するからといって、遠慮するな』と教えられた。）

ご覧いただいたチャートが示すように、『たまかつま』の幅広い項目の中で、本居宣長の研究の約4分の1が、言語学で占められています。『古事記伝』を注意深く読んでいただければ、気づかれるでしょうが、宣長は人間の言語、すなわち言葉の意味・ニュアンス・使い方に敏感であったことが注目されます。私たち現代人は、初期時代の国学者をその当時の環境を十分考慮すれば、彼らの偉業の中に素晴らしい知的宝庫を見出すことができるでしょう。